

月刊

みんな
ねっと

4
2019

◆特集◆

超短時間雇用という新しい働き方のデザイン

- 1日15分からの超短時間就業モデル(近藤武夫先生に聞く)●障がいのある方の“超”短時間雇用制度「ショートタイムワーク制度」(木村幸絵)●川崎市短時間雇用創出プロジェクトの取組について(平井恭順)
- みんなねっと相談室から(第1回)「耳も心も傾けて」
- 家族が家族に伝える教育プログラム「家族学習会のススメ」①その成り立ち
- 知ることは生きること(青木聖久)連載40回《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑩》
私は「この言葉」を聞くために生まれてきたのかもしれない



みんなのわ—読者のページ 2

特集 超短時間雇用という新しい働き方のデザイン

- 1日15分からの超短時間就業モデル（近藤武夫先生に聞く） 6
障がいのある方の「超短時間雇用制度」「ショートタイムワーク制度」（木村幸絵） 10
川崎市短時間雇用創出プロジェクトの取組について（平井恭順） 12

多事彩々 親愛なる猫さん（野村忠良） 14

みんなねっと相談室から 《第1回》 耳も心も傾けて 16

家族が家族に伝える教育プログラム 「家族学習会のススメ」 ①その成り立ち 18

街の診療所からのお便り【連載143】（増本茂樹）
…どう考えたか、どう感じたか 確かめてみましょう… 20

ダイアログ①つながろう ダイアログ②つながろう～日本各地でのさまざまな取り組み～
（第1回）オープンダイアログってなんだろう？（座談会） 24

知ることは生きること（連載40回）私は「この言葉」を聞くために生まれてきたのかもし
れない《自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑨》（青木聖久） 28

ワタシ。統合失調症なんデス。小田島六軒【第1回】 34

お知らせします みんなねっとの活動 36



感想・意見・投稿を募集しています

メールでの原稿募集を始めました。
アドレス：minnanet.seishinhoken@outlook.jp
・「みんなのわ」コーナー（300～350字程度）
・「地域の話」コーナーへ皆様の原稿をお寄せ下さい！（1000～1200字程度）

1日15分からの超短時間就業モデル

東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 近藤武夫先生に聞く

今月号では、障害のある人々が働く上で、残された問題を整理し、その解決方法のひとつとして、東京大学先端科学技術研究センター（以降、東大先端研と略）が自治体や企業と連携し実施している「超短時間雇用」という新しい働き方について、近藤先生にお話を伺いました。

▼超短時間雇用を考えられた背景にある問題は？

障害のある人々にとって、日
本型雇用には雇用参加しようと
するときに厚い壁があります。

一つは、障害者手帳を所持し
ていて、かつ最低でも週20時間
以上働くことができる障害者で
なければ、障害者雇用率にカウ
ントされないの、障害者雇用
促進の制度の恩恵が受けられな

いことです。

二つ目は「なんでもできる人」
であることが常用雇用では暗黙
の了解になっていることです。採
用時には職務の定めがなく、数年
に一度行われる配置転換ごとに、
職場から全く異なる仕事に対応
することを求められることも一
般的で、珍しくありません。障害
のある人はいろいろなことができ
る人たちですが、障害や疾患の
ため、なんらかの難しい業務があ
ることも事実です。その結果、職
務が明らかであれば働ける人を
排除する職場となってしまう
ている可能性があります。

▼この問題に対して、どのよう
な取り組みを始めたのですか？

東大先端研では、「通常の職場
で」「超短時間（20時間未満）で」



近藤武夫先生（写真提供：東京大学先端科学技術研究センター）

「職務を明確にした上で」働く仕組みについて、実践を通じた研究を行ってきました。精神障害や発達障害、重度身体障害などの当事者のうち、長時間労働が難しかったり、心身の調子の変動が激しい人など、これまでの障害者雇用から排除される傾向にある人々を、最短15分から雇用しています。この雇用の取り組みを「Inclusive（包括的な）and Diverse（多様な）Employment（雇用）with Accommodation（配慮）」の略で『IDEA（アイデア）モデル』と呼称しています。自治体内に超短時間の仕事と障害のある人々をマッチングする仕組みを構築することも重要なポイントにあります。

▼IDEAモデルの特徴を教え

てください。

IDEAモデルでは、「少数の障害者を1つの職場で週に30時間雇用する」のではなく、『週に1時間働く人を30人雇用する（超短時間の労働時間を積算すると1名分の雇用時間を何名分作れたかを可視化する）』という「積算型雇用率」の提言もしています。基本的に1つの職場では1名程度の雇用とし、企業全体あるいは地域全体でまとめ、通常の障害者雇用で1名とカウントされる週30時間の雇用を生み出すという考え方です。これまで雇用対象となりにくかった人の中から、何名分にあたる雇用時間を生み出せるか、との新しい視点で、障害のある人が雇用参加する可能性の拡大

を目指しています。既存の雇用促進枠組みを否定するものではなく、それに加えて、通常の障害者雇用の枠組みでは参加が難しい人であっても、超短時間から通常の職場で働く機会を作ることができます。

また、特定の職務内容をあらかじめ明示して、その明示された職務内容で雇用することを前提としています。職務は清掃や軽作業などから、業務管理、翻訳やプログラミングなどの専門分野まで多岐にわたります（実際には例えば「胃カメラの洗浄」、「デニッシュパンの生地整形」のように、詳細に職務を決め、対応する労働時間と対価を決めています）。その職場で必要とされている職務を明確に定めて、

障がいのある方の「超短時間雇用制度」 「シヨートタイムワーク制度」

ソフトバンク株式会社CSR部CSR1課

木村 幸絵ゆきえ

◆シヨートタイムワーク制度をはじめたきっかけ

ソフトバンク株式会社（以下、ソフトバンク）では、東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野（以下、先端研）の協力を得て、障がいにより長時間勤務が困難な方が週20時間未満で就業できる「シヨートタイムワーク制度（以下、本制度）」を、2015年9月からトライアル導入を経て、2016年5月に本格導入しました。導入してから約3年で累計31人の方に本制度を利用いただいています。

ソフトバンクと先端研は、障がいのある子どもたちの生活や学びをICT（情報通信技術）で支援する事例研究「魔法のプロジェクト」に2009年から取り組んでいます。取り組み開始から現在までに、彼らの学びは大きく変化しました。しかし、「社会はどうだろうか、障がいのある人々を受け入れる環境ができているだろうか」「魔法のプロジェクトで障がいのある子どもたちの学びを変えたように、障がいのある人々が働ける環境を作ってほしい」、それが本制度のはじまりでした。

◆企業として工夫した点や気をつけた点

本制度導入時に意識したこと
は、「障がいのある方を雇用すること」を一番の目的にしないということです。「障がい者支援のためにコストや工数がかかっても実施する」という考え方は、継続的に取り組む視点で考えた場合、ソフトバンクを含む多くの営利企業では、導入は可能でも制度としては続かないと考えました。そのため、シヨートタイムスタッフ（シヨートタイムワーク制度を利用して働く障がいのある方）が100%能力を発揮できるように、本制度を利用する部署に対しては事前に背景や考え方を伝え、業務内容を明確に定義し、シヨートタイムスタッフとマッチングを

川崎市短時間雇用創出プロジェクト の取組について

川崎市健康福祉局
障害者雇用・就労推進課 平井 恭順やすゆき

川崎市の現状

川崎市は、神奈川県の北東部に位置し、東京都と横浜市の間に所在する政令指定都市です。市域は7区から構成され、東京湾に面した川崎区（南部）から東京都多摩市（たまし）に隣接する麻生区（あさおく）（北部）まで、細長い形状をしており、工業地帯あり、豊かな自然が広がる里山ありと、多様な表情を見せる市です。

人口は151万人を超え、日本全体が人口減少社会に突入した現在においても、毎年1%弱の増加率を維持しています。市内に

おける障害者手帳の所持者は、平成29年4月時点で身体障害が約3万7千人、知的障害が9千5百人、精神障害が1万1千人、合計で5万7千人となっております。増加しています。

このうち、知的障害者は毎年4〜6%、精神障害者は5〜10%ずつ増加しており、特に18歳から64歳までの、生産年齢に該当する方たちの割合が非常に多くなっています。

短時間雇用創出プロジェクトの経緯と実績

こうした中、障害のある方に

対して専門職員が就労支援を行う、「障害者地域就労援助センター」においては、働く意欲・能力があるにもかかわらず、心身のコンディションから長い時間（1週あたり20時間以上）働くことが難しい方々の就労先が非常に少ないことが課題となっていました。そこで平成28年度から、こうした方々の活躍の場を広げることとを目的として、働く場の確保・マッチング、定着支援を行う「短時間雇用創出プロジェクト」を開始しました。

プロジェクトにおける平成31年1月時点の実績としては、就職者51人（うち38人が就労継続中、1年後定着率約62%）、求人企業数51社となっており、週当たりの就労時間数は合計で

《第1回》 耳も心も傾けて

みんなねっと
相談室から



水曜日午前10時：今日はどのような方から、どのようなお話しを聴けるのだろうか：そんな期待と緊張感が混じり合う中、留守電ボタンを解除します。

数年前までは、資格を持つ専門家の方が電話対応にあたっていましたが、現在では、精神障がい者の家族が同じような体験をもつ家族として相談電話の前に座るようになりました。



留守電の解除と同時に呼び出し音が鳴り始めます。そして1件の相談が終わる受話器を置くと同時に、また呼び出し音が鳴り響くという状況で、受話器を取ると「やっとつながりました」

た」といわれることがたびたびです。

申し訳ない気持ちとともに、全国には精神疾患・精神障がいという課題に直面して、深く悩み困っている人がこんなにたくさんいるのだという現実を突きつけられていることを感じます。



いただく電話の7割は家族の方、そして3割ほどが当事者の方からです。その中には、件数はわずかですが、友人や知人と名乗る方、あるいは近隣の方からも電話が入ることがあります。相談を受けるといふことは、その方のお話しを「心を傾けて」聴くことだと考えています。お

話しを聴くということは、その方の聴いてほしいことを聴くことで、こちらが聞きたいことを聞くことは異なり、どれだけ相手の方の本当の思いに近づくことができるかが大切です。それは簡単なことではなく、毎回のように、これでよかったのかという思いが残ります。



あるとき、受話器を取ると、「精神の家族会ってどんな人たちがやっているのですか!？」と激しい口調でいわれました。

「精神疾患や精神障がいをもつ人の家族の組織ですが、何かお困りのことがありますか?」と尋ねると、「ある家族会に精

神疾患の家族のことで相談電話をしたら、『あなた自身が病気のようにだから、すぐに精神科に行きなさい。家族は情報を知ることが大切だから、家族会にも入らなければ駄目です』と上から目線で断定的にいわれました。あんなふうに、上から目線でああしろこうしろというようなところに、誰も入ろうとは思いませんよ」から始まり、しばらくは興奮で言葉が止まらないようでした。

耳を傾けて聴き続けたあとに、勇気を出して相談の電話をされたのに、そのように気分を害するような経験をさせてしまっただけで、申し訳ない気持ちも伝え、今後はこのようなことにならないよ

うに何らかの対応を考えたいと思います。と電話を切りました。



私たち家族は困っている方に対して、よかれと思ってアドバイスをしたくなりますが、それがこのように受け止められてしまうことがあるということを知ることがあると感じました。まず、誰よりも私自身が肝に銘じて、相談者の立場になってお話しを聴けるようにしたいと心に刻みました。

今月号から、電話相談から見えるさまざまな風景をお伝えしていくことになりました。どうぞよろしく願います。

(岡田久実子)

家族が家族に伝える教育プログラム

家族学習会のススメ

①その成り立ち…アメリカや香港に学ぶ

2007年NPO法人地域精神保健機構コンボが、家族学習会企画委員会を立ち上げ、精神疾患をもつ人の家族が同じ家族に伝える教育プログラムの立ち上げを検討し始めました。

当初、参加していたのは、精神科医、大学教員、保健師など専門職の方々でしたが、家族が実施するものということで、関東近辺の神奈川、埼玉、千葉、東京の家族会から家族が参加することにになりました。

参加したばかりの頃には、検討すべき内容を理解することができませんでした。なぜならば、そのような経験もなく、見たことも聞いたこともなかったので、「家族が家族に伝える教育プログラム」というものをイメージできなかったのです。

ただ、家族会活動に取り組む中で、個々の家族が体験したことや研修会などで学んだことなどを、新しい家族に効果的に提供できる方法がないだろうか

考え始めていたので、そのようなことにつながるものができればと考えました。

以前、ある家族から、「しなければ良かった負の体験も、人の役に立てれば財産になる」という言葉を聞いたことがあります。

家族会活動には、それを実現できる可能性も力もあると感じていましたが、その力を発揮するためにも、活動の柱になるような何かを求めていたのだと思います。

そのような家族の思いを、会議のメンバーである専門職の方々は、しっかりと受け止め、真剣に考えてくれました。

共通の課題は「発症間もない

方の家族を何とか助けたい」でした。そこで検討資料とされたのは、米国 (Family-to-Family) や香港 (Family-link) のプログラムでした。

それらのプログラムの資料を翻訳して研究することも始まりました。その資料は数センチの厚さがあり、なかなか大変な作業になることが予想されました。また、それぞれのプログラムの学習の期間が10〜12日間と長く、とても日本の家族会で取り組めるとは考えられません。

数回の会議の中で、行き詰まりを感じ始めた頃には、参加する家族会も少なくなっていました。そして、家族は家族でやり方を考えてみたいと思い始め、

専門職の方々も家族に任せてみれば…と考え始めていたようです。

私たち家族は無謀にも、自分たちでテキストを作ることに挑戦を始めました。

その土台となったのが、「じょうずな対処〜今日から明日へ」⁽¹⁾ でした。真夏の暑い日に何度も集まって、家族学習会のためのテキストを検討しましたが、結局、家族の意見を反映させる形でそ



『じょうずな対処〜今日から明日へ』

のテキストの改訂版がつけられることになったのです。

テキストが5章立てになっていたので、学習プログラムは5回、テキストを読み進めながら体験を語り合う進め方は、家族ゼミナール⁽²⁾を参考に検討しました。

「学習会」という名称ですが、テキストを読み合いながら、正しい知識を得ると共に、大切にしているのは体験の「語り合い」です。その詳しい内容については、次回からお伝えしたいと思います。

(1) 家族心理教育用テキスト。現在は、全改訂版としてコンボから発行されている。

(2) 全国精神障害者家族会連合会から発信された家族相互の学習プログラム。

街の 診療所から の便利

…どう考えたか、どう感じたか
確かめてみましょう…



連載
143
回

ましもと しげき
増本 茂樹
増本クリニック院長

〈学校に行けない〉

お母さんに連れられて女子中学生が待合室で待っています。並んで座っている姿は切羽詰まったようではなく、重症の病気ではないようです。

彼女は中学3年生のUさんです。受診室ではお母さんが横に座り、症状を訴えられます。

「この頃、頭痛や腹痛、吐き

せん。小児科や消化器内科に連れて行きましたが、薬を飲んでいても朝になると調子が悪いのです。午後には痛みや吐き気は少なくなっていました。このごろは一日中元気がないので、うつ病かも知れないと思い、精神科に連れて来ました」

〈病気だろうか？〉

低血圧で朝に元氣の出ない、起立性調節障害もあります。め

まいや立ちくらみはないのですね。うつ病では午前中に不調のことが多いですから、うつ病の心配はありませんね。食欲はどうですか？ 夜中にも深く眠れていますか？ 以前楽しくしていたゲームを今も楽しめていますか？ と聞くと、その辺は変わりはなく、逆にゲームをやり続けて、お父さんに叱られたという事です。いつから登校が不調になっているかを聞きました



座談会「オープンダイアログってなんだろう」
(豊島区「べてぶくろ」にて)

座談会参加者(敬称略)

- 岩本雄次=ファシリテーター
(ゆうりんクリニック 精神保健福祉士)
- 松本葉子 (みさと協立病院 薬剤師)
- 村杉香織、佐藤佑紀
(訪問看護ステーション KAZOC 作業療法士)
- 久保香代子、三ツ井直子、大越扶美子
(訪問看護ステーション KAZOC 看護師)
- 伊藤裕子
(KAZOC 板橋事業所・グループホームプラムタウン)

ダイアログでつながろう

ダイアログにつながるう

～日本各地でのさまざまなお取り組み

《第1回》

オープンダイアログ
ってなんだろう？

【はじめに】

昨年12月、KAZOCにつながっている8人が集い、「オープンダイアログ(以下OD)ってなんだろう」というテーマで座談会をしました。笑いあり涙ありのあの日の「感じ」が少しでも伝わると思います。書ききれない内容が山ほどありますが、凝縮してまとめました。

【そもそも…】

岩本…ODってそもそも何だと思えますか。心に浮かぶことはどんなことでしょうか。

松本…フィンランドの精神医療のシステム。

久保…開かれた対話…自由な感覚でキャッチボールできる対話。

知ることは生きること

連載40回

私は「この言葉」を聞くために
生まれてきたのかもしれない
(自らの人生の主人公としての家族の暮らし特集⑱)

日本福祉大学
みんなねっと理事 青木聖久

言葉は、まさに金言です。

絶対に生きて帰ってくるから

山川さんは、3人きょうだいの長女として、日本画の材料店を営む家に生まれました。

ところが、山川さんが小学校に入学する直前、お父さんは戦争に行くことになったのです。家を出る前、お父さんは山川さ

んに、「絶対に生きて帰ってくるから、待つとれよ」と。それから4年後、戦争から戻ってきたお父さんは、栄養失調で全身が腫れあがっていたそうです。

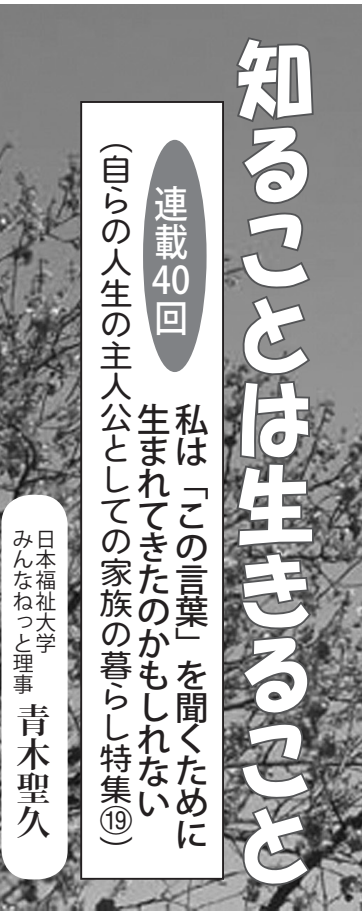
山川さんは当時を思い出し、「戦争は家族を引き離してしまうもので、絶対にはいけない、むごいこと」と、涙ながらに語ってくださいました。

向かいのおばあさんに見初められて

一方で、家では穏やかな祖母と山川さんは同居していました。山川さん曰く、「おばあちゃん子だった」。山川さんは、父親が戦争で不在の間も、風呂桶をもつて、祖母と手をつなぎ、銭湯まで

今回ご紹介するのは、山川優子さん（仮名、80歳代、女性）

です。山川さんは、これまで私の活動の節目ごとに、ゲスト講師として来てくださいました。まさに、名コンビです。精神科病院の家族教室、NPO法人の市民講座、大学のスクーリング。何よりも、一番最後にご紹介している山川さんからお聞きした





そのまま
出ちゃダメだよ！
ズボンが……！！

ソコの
お姉さん！

あ！

精神科のトビシ

「羨〜
七太郎〜？」



イエー！

お母さんが
ご病気が
ですか？

しっかりと
でしたね

スミマセーン！
助かります！
大丈夫ですよ
ワタシも丁度
母を待っていたので



ワタシ！
統合失調症
なんです！

キラーン

ワタシが
当事者です！

ハア……？



ワタシ。
統合失調症なんです。 第1回

小田島六軒

お知らせします みんなねつとの活動

■みんなねつと事務局活動日誌

みんなねつと事務局は日頃どんな活動をしているのかよくわからない。事務局長に連絡がつかないことが少なくないという声にお答えして、今回は、事務局長の対外的な動向（原稿作成時点2月別表参照）の一部を紹介します。

代表者理事会は、理事長、副理事長、事務局長による会議で、偶数月に開催しています。理事会から理事会までの法人運営の業務遂行の判断をしています。

この月は、九州ブロック、四国ブロックと続きましたが、当会は8ブロックあり、各ブロッ

2月1日(金)	<ul style="list-style-type: none"> 代表理事会 障害者雇用分科会
2月4日(月)	<ul style="list-style-type: none"> バリアフリー基本構想第2回検討会（国交省）
2月5日(火)	<ul style="list-style-type: none"> 公務部門障害者雇用に関するマニュアルについてのヒヤリング（内閣人事局） 身体拘束を考える会打合せ
2月6日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 精神障害者等の就労パスポート作成に関する検討会事前説明（厚労省） 月刊みんなねつと編集委員会
2月7日(木)~8日(金)	<ul style="list-style-type: none"> 九州・沖縄ブロック研修会 熊本大会
2月12日(木)~13日(金)	<ul style="list-style-type: none"> 四国ブロック研修会 徳島大会
2月13日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 障害者雇用分科会（理事長のみ）
2月14日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 相談支援の質の向上に向けた検討会（厚労省）
2月16日(土)	<ul style="list-style-type: none"> 中央法規出版年金本出版打合せ
2月18日(月)	<ul style="list-style-type: none"> 精神障害者等の就労パスポート作成に関する検討会事前説明（厚労省） 障害者雇用分科会事前説明（厚労省）
2月19日(火)	<ul style="list-style-type: none"> 厚労省要望書提出（身体拘束を考える会） 社会保障審議会事前説明（厚労省） 障害者雇用分科会（厚労省）
2月20日(水)	<ul style="list-style-type: none"> みんなねつと全国調査委員会
2月22日(金)	<ul style="list-style-type: none"> 社会保障審議会障害者部会（厚労省） 障害者政策委員会（内閣府）
2月26日(火)	<ul style="list-style-type: none"> JDF 幹事会 精神障害者等の就労パスポート作成に関する検討会（厚労省） 移動等円滑化評価会（国交省） 家族による家族学習会セミナー in 愛媛（事務局長補佐対応）
2月27日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 月刊みんなねつと編集委員会
2月28日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 相談支援の質の向上に向けた検討会（厚労省）

編集後記

編集後記

■この度、編集委員を務めさせていただくことになりました橋口亜希子と申します。昨年9月末まで、一般社団法人日本発達障害ネットワークにて事務局長を務めておりました。自身が発達障害のある子の親であり、私と同じ苦悩を後輩ママに引き継いではいけないうと、約18年活動を続けて参りました。今までの経験を活かし、かつ学ばせていただく場として編集委員を務めさせていたただきたいと存じます。(橋口)

者、児童の虐待通報を受ける窓口や、障害福祉サービスを行う法人の支援等を行っています。少しでも皆さんの暮らしに役立つ情報発信ができるよう、精一杯勤めさせていただけます。どうぞよろしくお願いたします。(宮坂)

■はじめまして。今月号から「月刊みんなねっと」の編集に参加することになりました菅原かほるです。現在は大学院で公衆衛生を学んでいる学生ですが、昨年末では製薬会社で新世代抗精神病薬のマーケティング、そして当事者・家族団体の窓口を担当しておりました。微力ではありますが、皆さんに役立つ情報をわかりやすくお届けしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。(菅原)

【賛助会費振込手数料ご負担のお願い】 みんなねっとでは、月刊誌の発行維持のため、会費振込(払込)手数料をご負担いただくこととなりました。つきましては、2019年1月の取り扱い分からまことに恐縮ではございますが、青い振込取扱票に変更させていただくこととなりました。事前告知が不十分とは重々承知いたしておりますが、何卒ご理解とご了承をお願い申し上げます。

月刊みんなねっと 通巻第144号(2019年4月号) 定価300円

発行日 2019年4月1日 賛助会費(会費に購読料含む)
発行者 公益社団法人全国精神保健福祉会連合会 個人・年間 3600円
理事長 本條義和 団体・年間(お問い合わせください)
〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-46-13 ホリグチビル602
TEL 03-6907-9211 FAX 03-3987-5466
郵便振替 00130-0-338317 ホームページ www.seishinhoken.jp

印刷・製本/倉敷印刷株式会社 表紙の写真/飯塚壽美